

Title	百科全書項目『教育』についての一考察
Sub Title	De l'article 'éducation' de 'l'encyclapédie'
Author	田沼, 光明(Tanuma, Mitsuaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.) ,p.105- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百科全書項目『教育』についての一考察
De l'article 'éducation' de 'l'encyclapédie'

田 沼 光 明
Mitsuaki Tanuma

L'article 'éducation' de 'l'encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences des arts et des métiers' (par Jacques François de Villiers), Je veux le expliquer. Villiers a dit: «Education, c'est le soin que l'on prend de nourrir, d'élever et d'instruire les enfants; ainsi l'éducation a pour objects, 1' la santé et la bonne conformation du corps; 2' ce qui regarde la droiture et l'instruction de l'esprit; 3' les mœurs, c'est-à-dire la conduite de la vie, et les quslités sociaux.» Et il a dit; «Les enfants qui viennent au monde, doivent former un jour la société dans laquelle ils auront à vivre: leur éducation est donc l'objet le plus intéressant, l' pour eux-mêmes, que l'éducation doit rendre tels, qu'ils soient utiles à cette société, qu'ils en obtiennent l'estime, et qu'ils y trouvent leur bien-être: 2' pour leurs familles, qu'ils doivent soutenir et décorer: 3' pour l'état même, qui doit recueillir les fruits de la bonne éducation que reçoivent les citoyens qui le composent.» Il a pensé que l'on aurait élever des citoyens utiles pour la société par l'éducation.

序

百科全書の項目『教育 (éducation)』については、今まで紹介したものも少なく、検討を加えた論文もないように思われる。そこで本論文では、私はまずその内容をやや詳しく紹介し、その特質を明らかにしてゆきたい。

さらに、考察では、特に執筆者ヴィリエと同じ百科全書派のディドロとの比較を試みたい。ディドロの公教育論『ロシア政府のための大学計画案』(以後『大学論』と記す)との比較、彼が公教育の形成目的とした「啓発された有徳の士 (hommes vertueux et éclairés)」や能力観の最上位に掲げた「天才 (génie)」との関わりについて考察したい。あわせて、教育概念の問題について考えてゆくつもりである。

第1章 'Education' という言葉について

本章では、百科全書の項目 'éducation' の内容に入

る前に、'éducation' という言葉の発生について概観しておきたい。

アリエスは 'éducation' という言葉の発生について次のように述べる。「W・フォン・ヴァルベルグの語源辞典は 'éducation' ということばが現われたのを 1527 年としている。それはつまり、人文主義的教育、一般的教養の概念と同時に現れたのである。このことばは institution (こちらの方はやがて、廃れてしまうことになる) ということばと、競合して使われるが、今でも instruction 知育と対立することばとしてしばしば用いられている。しかしながら、次第次第にこの二つのことばの区別はなくなっていくだろう。教育 éducation とは <人びとが子どもを育て教える instruire 方法である> (リシュレの『辞典』)。²⁾

アリエスは、中世から十八世紀に至る言葉の歴史から次のような見解を示している。「中世においては、今日の教育と呼ばれるものをおよそ意味するものとして、二

つのことばのグループがあった。その二つのことばのグループは、二つの現象に対応していた。第一のものは、見習奉公に、あるいは養うこと。栽培すること、大人の共同体の中で育てようという配慮に対応していた。……第二のグループは、知育の観念に対応している。学校学習、スコラスティックなどのことばである。』⁹⁾「見習奉公と学校での知育という二つの別々の観念に対して、ひとつの新しく、より一般的な、そして、子ども時代の特有性とそれを守る必要性の発見から生まれた別の観念がとってかわった。教育(éducation)は、子どもに〈学問〉(l'ecolage)と〈よき習俗〉(見習奉公)とを同時に与えるために、大人の社会から子どもたちを引き離す様式である。』¹⁾後者の学校における知育は、主に聖職者となるためのラテン語や聖書の知識を教授するものであり、一種の職業教育であって、この点、見習奉公と基本的に変わるものではなかったとアリエスは分析する。

このアリエスの研究を踏まえて、森田伸子氏は次のように述べる。「人文主義者による éducation 概念の発明は、見習奉公と学校という二つの概念ではとらえきれない新しい教育および文化現象が生まれつつあったことを示している。それはまず第一に、経済の繁栄と都市文化の発展の中で力をえてきた上層市民を中心とする人びとの間で、単なる個々の身分や職分にふさわしい個別的な徳を越えた、より普遍的妥当性を持つ優越のしるしとしての徳への要求が見られるようになったことを示している。そして第二に、このような徳はもはや、各職分における日常的経験の積み重ねによっては獲得することのできないものとされ、より普遍的で体系的な方法が求められたことを示している。これらの要求は、人文主義者による、古典文学の人間形成的価値の発見と結びついて新しい教育の理念を生ぜしめた。éducation が、学問的教養を通しての普遍的人間性の形成を意味する言葉として創造される。それと同時に学校の意味も本質的に変化する。学校はもはや貧しく粗野な聖職志願者たちの雑多な集まりではなくなる。それはかつての、雑然としてはいるが活気に満ちた知的訓練場から、将来の職業とは関係なく、すべての良家の子弟が人間的徳を身につけるために送りこまれ、一定の年限をすぎず秩序正しい教育の場となるのである。』¹⁾

以上が近代ヨーロッパにおける 'éducation' という言葉の発生についての概観である。森田氏によれば、'éducation' とは 普遍的妥当性をもつ 徳を身につけた「文化的エリート」を形成するものとして十六世紀に登場してきたものである。そして、それは社会的経済的地

位や職業を越えたものである。こうした基本的な意味をもつ 'éducation' は、十八世紀にはどのような特質を与えられるのか。次章で具体的にみることにする。

第2章 百科全書項目『教育(éducation)』の内容

本章では、ヴィリエ(Villiers)¹⁰⁾の執筆した百科全書項目『教育(éducation)』¹⁾の内容を紹介して述べる。

まず、教育(éducation)は「子どもたちを養育し(nourrir)、育て(élever)、教化する(instruire)ためにとられる世話」と規定されている。「教育はその対象として、1. 健康とすぐれた身体構造。2. 正しさ(droiture)や精神の教化(instruction)に関わること。3. 習慣いわゆる生活指導と社会性、をもつ。」

一般に教育についてヴィリエは以下の考察を述べる。

「この世に出てくる子どもたちは、その中で彼らが生きることになる社会をいつか形成しなければならない。それゆえ彼らの教育は最も興味深い対象となる。1. 子どもたちは教育によって、社会にとって有益なものとなり、それによって彼らは評価され、そこに彼らが幸福感を見出すような人間になるのだが、その子どもたち自身にとって、2. 子どもたちが扶養し、飾ら(décorer)なければならない家族にとって、3. 構成する市民たちがうけるすぐれた教育の成果を得ることになる国家にとって」ここに彼の教育観の一つの特質が出てきている。教育は単に人間の成長・発達という側面から捉えられるのではなく、社会の利益、国家の利益という関心から捉えられている。「行政官が早い時期から自分たちの義務と習慣を学んでおり、各市民が生まれた時に活用すべき才能(talent)を授けられていること、彼が政体の一員であること、その資格において彼は公共の福祉に協力し社会の実際の利益をもたらさうあらゆるものを追求すべきこと、調和をくずし平安やよき秩序を乱す者を選ばねばならないことを予め知らされている。そうしたことは一つの国家にとって何と幸福なことだろう」そのため教育が必要となる。「国家に市民階級が存在せず、彼らに適切な有力な教育も存在しない、すなわち、領主の子弟、貴族の子弟、行政官の子弟の教育、農村の子どもの教育も存在しない国家には、宗教的真理を学ぶ学校があるように、子どもたちがより多くの知識をもって活動できるために、訓練、実践、国家の義務や美徳を教える学校が必要である。」「各種の教育が知性(lumière)と根気(persévérance)とともに与えられるならば、祖国はうまく構成され、よく統治され、隣国からの攻撃から保護

されることになる。」

ヴィリエは、素質・適性に合った教育を主張する。「植物の栽培と子どもの教育の間にはかなりの類似がある。両方共自然がその資質を生み出すことになる。畑の所有者がそこで産出させたいと思うものが、その土地に適している時のみ、彼は有効に仕事をさせることができる。啓発された父親も、見識経験をもつ教師も同じく生徒を観察しなければならない。そして、観察の時期の後に、父親や教師は生徒の性向、傾向、趣味、性格を識別し、何が生徒に適しているか、いわば社会というコンサートの中でその生徒が担うべき役割は何かを知らねばならない。子どもたちの性向を誇張してはいけないが、子どもたちが後で、あなたの予測では自分には適していなかったということを知るような職業を軽率に選ばせてはならない。できる限り子どもたちから誤まった過程を除いてやらねばならない。職業選択に関してよき指導のできる経験をつんだ親をもつ子どもは幸せである。残りの人生が幸福になるか不幸になるかはその選択にかかっている。」この素質重視の考え方にも社会的なもの関わってきている。子どもの性向は社会に有益な職業に就くことを目的に分けられる。この関心からヴィリエは子どもの適性に合わせた教育、職業指導を考えている。

以上の、教育一般についての考察に続いて、ヴィリエは、冒頭にかかげた3つの内容、すなわち、身体、精神、習慣の3つの内容について詳述する。

1. 健康 (santé)

この部分は、健康と医学的知識を与えることの重要性を主張したものであり、化学者にして医者であるヴィリエの面目躍如たるものがある。「望ましいことは、若者がある年齢に達したら、解剖学や動物構造学 (économie animale) の知識をいくつか与え、胸、肺、心臓、胃、血液循環等に関することをある点まで教えることである。」

こうした知識を知っているからといって、健康が維持されたり、体が丈夫になったりするとは限らないが、ヴィリエはこの知識を有益な、我々にとって本質的な知識であるとし、次のように述べる。「私は白状するが、胃のあらゆる発条やその役割について可能な限り知っている不具者が、それを知っているがゆえに、強健な体質をもち良好な健康を享受している。胃について何も知らない者よりよい消化をすることはない。けれども、私の言う知識は非常に有益なものである、それらの知識が精神を満足させるのみならず、それらによって我々は我々自身で多くの病気を予測し、その点について言われている

ことを理解できるからである。」

ヴィリエは古人の言を引いて、「健康は自然の恵みであるのみならず、節制 (sobriété)、適度な運動、悲しみやあらゆる感情を遠ざける感情を遠ざけることによって保たれる」ことを指摘し、節制の重要性を述べる。

彼はまた、個々人の性格に合った健康指導を主張する。「未開人の中には、そして我々の中にさえ、生まれついて大変健康で、泳いで川を渡り、寒さ、飢え、渇き、睡眠不足に耐え、病気になるっても治療の救けなしで自然治癒してしまう子どもがいることを私は知っている。そこから、自然の知恵ある配慮に身を任せ、すべてに慣れなければならないという結論が出てくる。しかし、この結論は正しくない。……このように考えている者は、疲労により押しつぶされ、人はあらゆるものに慣れることができるという偏見の犠牲となる無数の子どもたちを考慮していない。」ヴィリエは、子どもを育てるのに軟弱な方法はよくないが、あらゆるものが万民に等しくよいということはなく、個々人の身体について経験的に知られることを考慮して、各個人各々に適切な方法を用いるべきと考えている。

さらにヴィリエは、治療技術を営む者には厳しい訓練をうけさせることを主張し、市民は病気になった場合、ヤブ医者やいかさま師に騙されないよう警告している。

健康に関する正確な知識を若者に与え、若者各々の体質に適った健康指導を行なうことが、医師や教育者の勤めであり、そしてそれらは万民に対してなされねばならないと、ヴィリエは考えている。

2. 精神 (esprit)

教育の2番目の対象は精神であるが、ここでは精神を「啓発し (éclairer)、教化し (instruire)、豊かにし (ornier)、統御する (regler) ことが問題となる。」

ヴィリエによれば、生徒には「素直さ (docilité)」が要求される、「それを用いて有能な教師は生徒をかなり高いレベルまで導くのであるが、他方、教師は精神を養なう (cultiver) 能力をもたねばならず、又、生徒に自分がそうしようとしていることを気付かせることなく、生徒を素直にさせる技術をもたねばならない。」そこから、教師の資質として次のような見解が出てくる。「教師は、温和で (doux) 柔軟な (liant) 精神をもち、授業 (leçon) という雰囲気なしに授業がその効果を生む瞬間を折よくとらえることができないなければならない。そのため、教師を選ぶのが問題となる時は、冷酷な (dur) 精神の学者よりも、碩学 (erudit) より知識は少なくとも柔軟で正しい判断力をもつ (judicieux) 学者を選ばねばならない。」

固くなな精神の人は教師には向かない。そのような精神の教師は子どもの精神も厳格でかたくなな (inflexible) ものになってしまう。他、ヴィリエは教育 (instruction) に適さない状態として、感情が高ぶっている状態、脳の器官が不調な状態、古い偏見にとらわれた状態を掲げる。「教えることが問題となると、常に生徒に柔軟で自由な (libre) 精神が前提とされるが、その精神によって、生徒は、自分が理解でき、順序よく年令や知識の自然な相関関係に従って自分に提示されたものすべてを理解できる状態になるのである。」

次にヴィリエは、子どもが教育可能になった時、まず最初に注意すべきことを語る。「教育の法廷は精神を形成し、子どもを惑わしうるすべてのものを彼から遠ざけることを目的としている。子どもには良識ある人だけが接し、子どもが善いもの以外見たり聞いたりできないようにすることが望まれる。……我々の一生のうちで幼少期に我々に形成される最初の知識や最初の観念というのは、除去するのが難しく、我々が次に理性から作り上げる習慣の規則として役立つ模範と同様のものを形成する。」子どもに与える最初の知識や観念は、その子の後の一生にとって大変重要な意味をもつ。彼が理性的判断のできる人間になるかどうかはこの点にかかっている。したがって、ヴィリエは、子どもが判断をしはじめたら、真実なるものみに同意させるように配慮し、子どもの理性を惑わし、想像力を恐がらせるような寓話や迷信や魔術等は遠ざけることを主張する。「子どもを恐がらせて面白がる者は大いにとがめられるべきである。それはしばしば、子どもの精神が馬鹿げた偏見で満たされるばかりでなく、子どもの脳の弱い器官が彼の残りの生涯で調子を狂わされることになる。妄想的観念が異常であればあるほどそれは脳に深く刻みこまれる。」「子どもたちを欺き、彼らを誤ちに導き、誤ちを増やして楽しむ者、誤ちを嫌悪せず喜ぶ者は大いにとがめられるべきである。」と同時にヴィリエは子どもに誘惑者や腹黒い人がいることを教えるように記している。

ヴィリエは、経験や実験を重視する。「子どもたちは深い熟考の結果である結合した論理や主張をとらえる状態にはない。かくのごとく、子どもたちに、知識の起源、相関、結合、従属の関係、観念の秩序、誤った仮定、不周延、性急さ、そしてあらゆる種類の詭弁について哲学者が述べることを語るの馬鹿げたことだろう。しかし、私は子どもたちの傍にいる者はそういったものすべての点について十分な学識をもって知っていることを望む。そして、例えば一人の子どもが解答したり話し

たりする場合問題となっていることを前提としてしまった時、教師はその弟子が論点先取の虚偽に陥っていることを知ってほしい。が、もし科学的な表現を用いなければ、教師はその若い生徒にその (教師の) 答えが不完全であると感じさせてしまうだろう。なぜならそれが生徒たちに要求されていることなのだから。」生徒にはあくまで論理的に筋の通った話をすべきである。わからないことは「知らない」と言うべきである。

習慣から体験的に得られる知識の重要性をヴィリエはさらに強調する。柔軟な精神をもってよく理解し、よく答えるには、まず感覚 (sens) を通して物事を把握しなければならぬ。「もしあなたが幸い柔軟な (souple) 精神の若者を教育 (instruire) しなければならないとしたら、とりわけ、生活習慣から彼がすでに理解できているものと結びつきえない新しいものは何も言うてはならないことに注意すべきである。」個々の知識が生活習慣から得られ、それが集まって一般的な知識が形成される。この知識の従属関係をよく知って知識を教授しなければならない。生まれたばかりの子どもは考えることもなく感じ、存在する。まず個々の知識を与え、それから後に一般的な知識や抽象的な知識へと進むようにしなければならない。以上のようにヴィリエは生活習慣から知る知識を最も重視するのである。

生活していく中で得た知識がある程度存在した後に、生徒は教師の語る原則や真実を理解できるようになる。したがって、教師は生徒が前提となる知識を獲得していることを知った上で教授すべきである。こうした見解を述べた後、ヴィリエはブジエ Bussier 神父の言葉を引用する。「神の存在の知識に達する前に、子どもたちは生活習慣から多くの感覚でとらえられているものについての知識を得る。……私にとっては、当然私は、被造物によってしか創造主を知ることはできない。被造物が私に提示するのと同じようにしか創造主の観念をもつことはできない。」さらに、ブジエの引用は、身体と精神が相互に依存していることを語りつつ、この二つが異なる本性をもつものであることを語る。「身体と精神が異なる二つの本質であることを我々は理性的に否定できない。」この身心二元論がヴィリエの考えかどうかは不明である。化学者であり医師であったヴィリエの考えとしては少々古風な感もあるが、ブジエ神父の引用はこの項目『教育』の中で大きな部分を占めている。

次にヴィリエはラテン語やギリシャ語のような死語を教える場合を論じている。ここで彼は、古典語の下にフランス語訳を対照させ、その中で「子どもたちがまず感

覚や実践によって、語尾の用途や古代の人々が語尾から作った使用法を知らされる」ような方法を論じている。意味もわからないまま古代語の語尾変化や格変化を覚えさせるのはよくないと彼は考える。「果物の味を知らせるには、無益な言葉をもて遊ぶかわりに、その果実をみせ味わせることがより簡単である。」またヴィリエは次のように言う。「私が若い頃、キケロの數行を説明されて理解した後、野原を歩きながらパーズルの 10~12 行の説明を聞かされたのが嫌だった。これは、フランス語を外国人に教えるのに、彼にラシーヌの作品の一場を読ませ、同じ授業でモリエールの人間嫌い他の作品の一場の講義をうけさせるようなものである。こんなやり方は、読んでいるものに興味をいだかせ、趣味を与え、美と善の模範的な観念を形成するのに適切だろうか。」

ヴィリエは精神鍛練の問題に戻る。精神の状態の一つに眠り状態がある。これは必要不可欠なものであるが、「この状態では、他の多くの病気のように、我々は、真実と誤りを見分けるのに必要な精神の柔軟さ、自由さを用いることができない。」「全体にしろ、部分にしろ、以前に見たことがない限り、眠りの中では我々はいかなるものも考えることができない。……もし時々自然の中にはない奇妙なもののイメージが眠っている間に我々の想像力に浮かぶとすれば、それは、視覚を用いることによって、我々が様々な時や様々な対象の中に、その架空のものを構成する異なる成員をみたためである。」眠っている状態は理性的判断を下す精神の状態にはない。

ヴィリエは、身体と精神の結びつきを再び強調し、身体的障害の精神への影響を語る。「ある年令に達すると、我々の感覚器官や脳の器官は、あらゆる人々の一般的経験が我々に教えている自然の掟にしたがって、我々の魂がある程度公正に役目を果たせるのに必要な状態となる。ここで理性の年令に達したといわれる。しかし、そうした器官の働きが乱されると魂の機能は中断される。それはしばしば、愚者、狂人、てんかん患者、卒中患者、脳充血の病人、激情に身を任ねる人にしかみられないことである。」理性は少しの酒でも乱される。「かくの如く、身体のように精神も病気をもっている。強情 (indocilité), 頑固 (entêtement), 偏見 (préjugé), 性急さ (precipitation), 他人のことを考えられないこと、感情 (les passions) 等。」それらは身体的要因とも結びついている。これらを治す方法は 2 つあり、一つは「生活律、節酒、禁欲、精神の病気を各種を治すのに適切な食事習慣」であり、二つ目は「病人をいらだたせうるあらゆるものを除くこと」である。さらにヴィリエはキケロ

を引用して、賢者の授業を聞くことと共に、治るという希望をもたせることを勧めている。「その病気を語るすべての者を遠ざけさせることは健康の始まりである。」

次に、ヴィリエは認識の問題を扱っている、彼は言う。「我々は感情 (sentiment) 又は感覚 (sensation) を生じさせたり、中断させたり、我々の好みに正確に合わせることをやめさせたりすることができないので、感情又は感覚は、我々自身とは別の原因により我々の中で刺激させる。」「個々の各知識は、個々の原因もしくは固有の理由 (motif) をもっているはずである。その理由は、同様に本質的で分けることのできない 2 つの条件を持たねばならない。1. それは外的なものでなければならない。すなわち、それは眠っている時のように我々自身の想像力からくるものではない。2. それは固有の理由である。すなわち、そうした個々の知識が前提とし、それなしでは、その観念が精神に生じてこないものである。」外的に固有に存在するものを我々は感覚や理性により捉えてゆくというのがヴィリエの認識論である。彼は外的で固有な理由の他に正当な理由 (motif légitime) を考える。「我々の内的感情 (sens interne) は、諸状況に助けられて、我々に、我々の判断と物事の現実との関係を感じさせる。我々が目ざめている時、眠っていないということをかかなり感じている。我々が健康な時、病気でないことに納得させられる。かくの如く、我々が正当な理由にしたがって判断する時、我々の判断がかかなり根拠のあるものであり、異なる判断をとることは誤りであるということに納得させられる。幸運にもよい頭と結びついた魂は、誤りと偏見をもつ感情 (passion) の状態から、魂が知性 (lumière) と自由によりその役目を果たす理性の冷静な状態へと移る。」「若者に判断の理由をしばしばたずねるのは非常に有益な実践であろう。それが非常に共通の判断がなされた場合でさえ。そして、とりわけ、彼が想像しているだけで、自分の言っていることは根拠のないものだと思いつく時には。」ヴィリエは生徒に様々な政体を教えた後、地図帳と辞書を用いて新聞を読ませることを有益と考える。

最後にヴィリエは学校の模範として軍の学校を掲げる。そして、生徒たちが啓発され、常に覚醒状態にあり、思慮深くある習慣をつけて学校を卒業することを望んでいる。

第 3 章 考 察

以上、項目『教育』の内容を紹介してきたが、本章ではその特質を考察してみたい。

この項目は執筆者ヴィリエが医者であり化学者であることを反映し、健康や精神医学的な配慮に注意が払われている。健康維持のためある程度医学的知識を与えることは我々の生活にとって本質的なこととされている。また、幼少期から怪談など奇怪な話、恐ろしい話を聞かせることは、後に理性的判断のできない精神錯乱に陥らせる危険があることが指摘されている。さらに、精神病と身体的欠陥との関連が考慮され、精神病の治療には、生活律、禁酒、食事療法、病人をいらだたせないこと、病人に治ると思わせること等が掲げられる。これらは当時の水準で考えられたものではあるが、医学の進歩の成果を積極的に取り入れる科学的精神の現われである。また、精神医療の中には現在でも有効な指摘がいくつかみられる。

2番目にヴィリエの認識論及び感覚や生活習慣重視が特質として考えられる。

彼によれば、我々の感覚に捉えられるものは、外在的で固有の理由をもっている。つまり、外的に固有に存在しているものを我々の感覚がとらえていくのである。また、外的に存在するものの関係における正しい理由を理性的に捉えてゆくというのが彼の認識の考え方である。そして、感覚的に生活習慣を通じて個々の知識を得ることがまず第一にすべきことであり、それからそれらを結びつけて抽象的な思考に入ってゆくのである。自分の認識や判断を科学的、実証的に確かめていくことを彼は勧めている。

こうしたことは当時の教育学上の重要な原則と考えられていた。例えば、コメニウスの教授学理論の主要原理は、自然主義、感覚主義、事物主義などであるが、『大教授学』を通読することによって、コメニウスが正確に感性的感覚を一切の認識の出発点とみなしていること、さらに事物の直観的知覚をそれ自体のために要求しているのではなく、事物の本質の認識とその存在の原因の認識をめざすために要求していること。などを知ることができる。事物の真の認識と理解は、客観的に存在する外界の感覚的知覚のうちにその起源を有し、そこから出発しなければならないという原理からの必然的帰結は、あらゆる教授に直観性を要求するという教授学上の原則をもたらしている。⁹⁾『大教授学』の「16章の表2の原則は〈自然は形態をあたえる前に、素材を先ず用意する〉であり、ここから〈形式よりさきに素材を〉という要求が生じ、そこから導き出されることは、〈1. 教科書およびその他あらゆる教具が用意されていること。2. 言語よりさきに認識能力を育てること。3. どんな言語も

文法によってではなく、適切な著作家の作品によって学ばせること。4. 事物の知識を言語技術よりさきに、5. また実例を規則よりもさきに教えるようにすること〉である。¹⁰⁾ ヴィリエの『教育』にはコメニウスの延長上にある考えが多数あるように思われる。

ヴィリエと同じ百科全書派のディドロも、実験や感覚を重視している。ディドロの『大学論』の学芸学部(Faculté des arts)には博物誌(histoire naturelle)という科目があり次のように述べられている。「生徒たちが自分たちの感覚(sens)を使うことを学ぶのは博物誌の研究においてであるが、その感覚を使うことは、それなしでは生徒たちは多くのものを知らなかったり、もっと悪いことには他の多くのものを知りそこなったりしてしまう技術であり、我々の認める唯一の方法をうまく採用する技術であり、あらゆる教育の前提となるすぐれた基本的原理がそこから作り出されてくる技術なのである。¹⁰⁾ ディドロはそういった感覚により容易に知ることができる知識の学習を第一とし、それから難かしい専門用語に入る旨記している¹¹⁾。古典語についても使用することと毎日の訓練を重視する¹²⁾。ヴィリエとディドロの見解は少なからぬ共通点をもつ。

3番目の特質として、私は素質への言及を考えてみたい。ヴィリエは子どもの素質に適ったものをやらせ、将来適切な職業に就けるようにすることを主張する。これはディドロが『エルベシウス〈人間論〉反駁』で述べたことと符合する。ディドロは次のように言う。「教育の重要性はどこに存するか。それは、親がそうすることを好むような、一般的に分別のある最良の子どもを作ることでは全くなく、子どもにとって適切なものに子どもを集中させることである。すなわち、すぐれた記憶力に恵まれているならば学殖に、数と空間を容易に結びつけるならば幾何学者に、熱情と想像力があるとわかれば詩人にすることであり、他の学問についても同様である。そして、よき教育論の第一章は子どもの生まれつきの素質を理解する方法でなければならない。¹³⁾

4番目にディドロの教育観との比較を通して項目『教育』を考えてみたい。

ディドロの『大学論』は、有益性(utilité)を基本原理とした公教育論である。その目的として「啓発された有徳の士(hommes vertueux et éclairés)」の形成を掲げている。そこではまず知識の伝達が重要な要素を占める。ディドロは言う。「一国民を教育する(instruire)こと、それはその国民を文明化する(civiliser)ことである。そこで知識を絶やしてしまうこと、それはその国

民を未開な元の状態に戻してしまうことである。』¹⁴⁾「公教育の目的は、それがいかなる領域にせよ、学識深い人間を作ることではなく、それを無視することが人間にとってあらゆる生活状態の中で有害であり、いくつかの社会では多かれ少なかれ不名誉であるような多くの知識を教える (initier) ことである。』¹⁵⁾ 知識を有し、思慮深く、社会にとって有益な市民の形成がディドロの公教育の内容であり、そこでは有益な知識の伝達が重要となる。この知識の伝達という点はヴィリエの考えとも符合している。その知識の獲得において感覚や経験を重視する点も両者共、同じである。ここにおける知識とは、現に存在するものや存在するもの同志の関係といったものについてであり、そうした外在的なものを捉えたものである。いわば、そうした知識は客観的・一義的に決まるものであり、それ故、教師から生徒に伝達が可能となる。ヴィリエとディドロの教育概念はこの領域を意味している。

私はここでディドロの啓蒙活動の特質について考えてみたい。私としてはこれも広義の教育と考えており、(ディドロは上記の如くこれを教育とは呼んでいない)、啓発された有徳の士の形成に関わると思われるからである。ディドロは様々な思索を展開し、そこには多くのアンチノミーが存在する。彼はそれを諸作品に投影し、例えば彼の小説はアンチノミーを各々投影された数人の人物の対話という形式で書かれている。彼の作品は結論を示すという形ではなく、問題を呈示する形で展開し、結論はそれに参加した読者自身が主体的に出さなければならない。ディドロの作品の読者は必然的に思索し自ら答えを出さざるを得ない。これがディドロの作品のスタイルであり、彼の啓蒙活動の大きな特徴である。

このディドロの文章のスタイルは、ヨーロッパの君主たちに向けて書かれた『文芸通信』という雑誌にも書かれている。ジャック・ブルーストはこのことを次のように解説する。「ディドロはコントをまさに物語るその語りくちにおいてロシアのエカテリーナ、その他の君主に向かって、真実というものは、上から下へ向けて与えられるべきものではないということを教えているのです。つまり真理は君主が上から下に向かって述べ伝えるべきものではない。あえて言えば、たった一つの真実などというものもない。いくつかの真実があるのだ。そして真実とは常に探し求められるべきものだ。また真実を決定する権威というものもない。一つのテキストにおいて作者とは真実を読者に向かって申し伝えるものではないし、また読者は、その真実をただ受けとるだけではない

く、一つの真実を生産するその過程に参加しなければならないのです。そしてまた明日になれば同じ読者はまた別の真実の生産に参画しなければならない。そういうプロセスを通じて作者と読者の双方の間で真実の探究が進められなければならない。これこそディドロがコントにおいて伝えようとしている本当の政治的なメッセージではないかと思います。』¹⁶⁾

このディドロの啓蒙活動を私は広義の教育と考えている。私の教育概念は二つの部分をもつ。一つは基本的知識の伝達であり、二つ目はそれらの知識を用いた真理の探究である。私はこの教育観からディドロを解釈している。18世紀の「教育」はヴィリエやディドロの見解からすると知識の伝達の意が強く、探究の方の意味は入ってこないように思われる。私の教育概念とヴィリエの教育概念のズレはディドロを通して明確となるように思われる。

5番目に私は天才の問題を取り上げたい。創造する天才についてディドロはその能力観の最上位に置いている。さらにディドロは、天才と啓発された有徳の士とは能力が異なること(創造と理性的判断の相違)、公教育には天才を損うものがあること(理性の訓練、規則正しい生活等)などの理由から天才を公教育の枠外にもっていくことを考えている¹⁷⁾。ヴィリエの項目『教育』も、ディドロの『大学論』同様、啓発された有徳の士を形成するものであり、天才形成の教育という要素はない。この項目で考えられているのは知識の伝達、理性の訓練といったものであり天才の創造活動の援助ではない。ヴィリエやディドロの教育概念と天才とは相入れない要素が多々みられる。

さらに、これは現代の精神病理学からの成果であるが、天才は多少、分裂病、躁うつ病、神経症などの傾向を示すものである¹⁸⁾。ヴィリエの『教育』において、こうしたものは治療すべき病気なのであり、肯定的要素は見出されていない。また、天才の創造には、無意識や夢も重要なものになると思われる。

註

- 1) 桑原武夫編『ルソー研究』(岩波書店、1976) P. 345-446 に若干紹介されている
- 2) フィリップ・アリエス『教育の誕生』(中内敏夫・森田伸子編訳 新評論 1983) P. 185
- 3) Ibid. P. 184
- 4) Ibid. P. 185
- 5) 森田伸子『子どもの時代—(エミール)のパラドックス』(新曜社 1986) p. 15-16

- 6) Jacques-François de Villiers は医者にして化学者、医学上の著作は多数あり、また『百科全書』の項目『化学 (Chimie)』を執筆
- 7) 項目『教育』の翻訳・内容紹介は、Diderot et D'Alembert 'L'encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences des arts et des métiers' (Pergamon Press, New York/Paris) P. 1946-1097 を用いた。
- 8) 渡部品他編著『教育演習双書9—西洋教育史』(学文社, 1978) P. 108
- 9) Ibid.
- 10) Plan d'une université. (Euvres compétes de Diderot revues sur les éditions originales par J. Assézat. (Garnier frères, Libraires-éditeurs. Paris 1875 以後 A. T と略記) 3, P. 461
- 11) Ibid. P. 470
- 12) Ibid. P. 471
- 13) Réfutation suivi de l'ouverge d'Helevétius intitulé l'Homme. A. T 2. P. 374
- 14) Plan d'une université A. T 3. P. 429
- 15) Ibid. P. 444
- 16) J・ブルースト, 中川久定, 鷲見洋一『鼎談 デイドロ—この未知なる人物』(岩波書店『思想』1984. 10) P. 17-18
- 17) 拙稿『デイドロの天才論—デイドロの能力観及び公教育論の限界についての一考察』(『三田哲学』87集 1988) を参照されたい。
- 18) 飯田 真・中井久夫『天才の精神病理—科学的創造の秘密』(中央公論社, 1985) P. 219-238